



Data
監督: トッド・フィリップス
脚本: トッド・フィリップス、スコット・シルバー
出演: ホアキン・フェニックス / ロバート・デ・ニーロ / ザジュー・ビーツ / ビル・キャンブ / フランセス・コンロイ / ブレット・カレン / グレン・クレシュラー / ダグラス・ホッジ / マーク・マロン / ジョシユ・パイス / シェー・ウィガム

👁️👁️ みどころ

アメコミに登場する極悪非道な悪役ジョーカーは、正義の味方バットマンの引き立て役のはずだが、何と本作は彼を主役とした、その“誕生秘話”。そんな同作が、ベネチアで金獅子賞を受賞したから全世界はビックリ!“発達障害”は難しい病気だが、“笑い病”もそれ以上に完治が難しい。ゴッサム・シティの最底辺で“負け組”として笑いの仮面をかぶって生きているアーサーは、一体どれが本性? そんな男がいったん拳銃を持つと、武正晴監督の『銃』(18年)で描かれた主人公と同じように大きな心境の変化が・・・?

本作後半では、ジョーカーによる“勝ち組”の男たちへの反発と凶悪ぶりを確認しつつ、ゴッサム・シティが現在の香港と同じような大混乱に陥る中での、ジョーカーの誕生をしっかりと目撃したい。

すると、ホアキン・フェニックスのアカデミー賞主演男優賞確実と思われる本作の「続き」では、正義の味方バットマンの新たな“誕生秘話”が・・・?

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

■□■ジョーカーはバットマンの宿敵で悪役だが・・・■□■

バットマンはスーパーマンやスパイダーマンと並ぶアメリカン・コミックのヒーロー。それに対してジョーカーは①犯罪界の道化王子、②虐殺する宮廷道化師、③憎悪するハーレクイン、④スパードのエース、など様々なニックネームで呼ばれているが、バットマンの宿敵で悪役だ。その特徴は緑の髪、赤い唇、白い皮膚だが、これは彼が化学物質のタンクに落ちたためらしい。

そんな悪役のジョーカーが登場するのは、主役であるバットマンのヒーロー性をより高

めるため。アメコミではそう相場（役割）が決まっているし、映画でもティム・バートン監督の『バットマン』（89 年）では、ジャック・ニコルソンが演じたジョーカーはそんな役割だった。また、クリストファー・ノーラン監督の『バットマン ビギンズ』（05 年）（『シネマ 8』127 頁）はバットマンの誕生秘話だったため、ジョーカーは登場すらしなかった。ところが、クリストファー・ノーラン監督の『ダークナイト』（08 年）（『シネマ 21』25 頁）は、「ひとりわが道を行く、ノーラン路線」を貫き、クリスチャン・ベール演じるバットマンを主役としながらも、バットマンを『月光仮面』のような単純明快な正義の味方、ヒーローとはしなかった。そのため、同作ではゴッサム・シティのまちを犯罪から守ってくれる正義の味方＝ホワイトナイトがバットマンなのか、それとも選挙で選ばれた新任の地方検事ハービー・デントなのか、わからない状態になっていた。さらに同作では、私が「どちらが主役？ ヒース・レジャーに注目！」の見出しで書いたように、白塗りの顔に耳まで裂けた赤い口という奇妙なメイクをした、史上「最凶」の極悪非道なキャラを持ったジョーカーの存在感が、助演男優賞を受賞したヒース・レジャーの熱演もあって際立っていた。

そんな諸事情のためか、アメコミのヒーローであるバットマンの宿敵で悪役のはずのジョーカーが、何と本作では主役に！しかして、本作はそんな“悪役”ジョーカーの“誕生秘話”だが、なぜジョーカーは笑いの仮面をかぶっているの？

■□悪役ジョーカーを描く本作が、ベネチアで金獅子賞を！■□

ヨーロッパで続いているベネチア、カンヌ、ベルリンでの3大国際映画祭は、基本的に小難しい映画が大好きだから、ハリウッドのアカデミー賞とはかなり異質な映画祭。それは世界的に周知の事実だが、第76回ベネチア国際映画祭で、アメコミ映画が最高賞である金獅子賞を受賞したことには全世界がビックリ！そのことを2019年9月10日付朝日新聞は、「ベネチアでコミックを基にした作品がコンペティション部門に入るのも珍しい。アート指向の作品を上映する3大映画祭では、『コミック＝通俗』と見なされているからだ。」と書いている。「だが、上映されるや、熱狂的な支持を集めた。会場で配られる映画紙『デイリー・チアック』の批評家10人による星取表でも、5点満点で平均4点の高評価を得たが、やはりメディア関係者らの間では、『最高賞はない』が大方の予想だった」らしい。そのため、「近年の3大映画祭でハリウッドメジャー作が最高賞を射止めるのは異例」だった。また、9月12日付読売新聞も、「ベネチア映画祭報告」として、「アメリカン・コミック（アメコミ）に由来するハリウッド映画の受賞は異例のこと」と書いている。

朝日新聞の紹介では、本作は「精神を病んだ大道芸人のアーサーが悪の道化師ジョーカーに変貌するまでの経緯を、リアリズムに徹した暗い映像で描く」もの。また、読売新聞の紹介では、「アメコミのヒーロー『バットマン』の宿敵の誕生までを、原作にはない独自の解釈で描いた人間ドラマ」で、「心優しい青年が、社会に見捨てられ、悪に転向する」ものの。このように、本作はアメコミ本来の（？）勧善懲悪ものではなく、まさしく“悪の権

化”ともいうべきジョーカーの“誕生秘話”を、排除、孤独、痛み、のキーワードの中で描いたものだから、格差社会に苦しむ多くの若者たちが、「反面教師」として学ぶことが多い映画とも考えられる。ちなみに、10月4日付日経新聞（夕刊）「シネマ万華鏡」では、映画評論家・渡辺祥子氏は、本作の評論のラストを、「不満を抱くひ弱な男の衝動的犯行の怖さ。一方的な思い込みで爆発する怒り。いまの日本でも現実には起こりうる（すでに起きている）冷めた犯罪の積み重ねの中に極悪ジョーカーが誕生する。」とまとめている。

ジョーカーの誕生秘話とその通りだとすれば、アメコミに誕生したジョーカーの日本版が日本に登場するのも間近かも・・・？それはともかく、このような「アメコミ異例の快挙」を踏まえながら、本作をしっかり鑑賞したい。そうすれば、2020年2月の第92回アカデミー賞でも、ジョーカー役を演じたホアキン・フェニックスの主演男優賞の受賞は間違いなし！そう確信できるはずだ。

■舞台は？時代は？主人公の境遇は？■

本作の舞台は、バットマン映画でおなじみのゴッサム・シティ。『ダークナイト』の中で、ゴッサム・シティのまちに自警市民としてバットマンが登場してきたのは、このまちを犯罪から守ってくれる正義の味方＝ホワイトナイトの登場を市民が求めていたためだ。ホワイトナイトの座を巡っては、当選で選ばれた新人の地方検事デントとバットマンが競い合った（？）が、それを上回る凶悪犯がジョーカーだったうえ、ゴッサム・シティでは市警内部に腐敗と裏切りが蔓延していたから、大問題。デントや市警が立てた作戦はジョーカーにお見通しとされていたため、いつも最悪の結果になっていたわけだ。しかし、本作の舞台もそのゴッサム・シティ。時代は1981年だ。

本作導入部では、大道芸人として“笑い”を誘うことによって世の中を生きて行こうとしているアーサー（ホアキン・フェニックス）の懸命に働く姿が描かれる。しかし、サンドイッチマンとしてピエロ姿で街頭に立っていると、3人連れのストーリーギャングの若者たちに看板を奪われ、追跡戦の末、逆にボコボコにされることに。そんな被害も職場では一切同情されないばかりか、逆にボスからは「損失分を給料から差し引く」と罵られ、失意の中で自宅に戻っても、そこには精神を病んだ母親ペニー・フレック（フランセス・コンロイ）がいるだけだ。この母親は心臓ばかりか精神も病んでおり、何が現実で何が虚構かの区別すらつかないようだから、かなりヤバイ。顔にケバイ化粧をし、観客の笑いを誘うべく素敵なダンスやパフォーマンスを提供する芸人ぶりはそれなりのレベルで、若き日を浅草のストリップ劇場で過ごした（？）北野武や渥美清の（大道）芸人ぶり（？）を彷彿させるが、いかんせん1981年のゴッサム・シティのまちでは、この程度の芸で生きていくのは容易ではないらしい。さらに、市の福祉予算が削減されていく中、アーサーが定期的に受診しているケースワーカーのカウンセリングと向精神薬の処方めも終わりだと告げられたから、弱り目にたた目だ。

もっとも、たまたまエレベーターで一緒になった女性ソフィー・デュモンド（ザジー・ビーツ）とは、ちょっとした“心の交流”が広がりそうだから、それがいい目に出るといいのだが・・・。

■□■ “笑い病” は病気？アーサー最初の犯罪は？ ■□■

日本では1995年にオウム真理教による地下鉄サリン事件が起きたが、日本の地下鉄は間違いなく世界一安全で快適な公共交通機関だ。まち中が落書きだらけのゴッサム・シティを走る地下鉄を見ていると、そのことがよくわかる。日本でも、最終便の地下鉄は泥酔客がいたりして危険もあるが、本作のように、スーツ姿の男3人が向かいの席に座っている1人の女性に絡むような場面はまずありえない。しかし、ゴッサム・シティの地下鉄では？

たまたまそんな場面に遭遇した仕事帰りのアーサーが、あのどぎつい化粧で目の前に現れ、ゲラゲラと笑い始めたから、3人の男たちはビックリ。「なぜ笑ってる？」の質問に、アーサーは何と答えたの？日本では、「発達障害」が大問題になっているが、アーサーが周りの状況に関わらず突然笑い始めるのは“笑い病”のためらしい。それは、彼が「笑いの止まらない病気」であるという証明書を持ち歩いてたから確かだが、一般人がそれを病気だと認識するのは難しい。したがって、一般人がケッタイな化粧や風貌のこの男を、精神病患者だと決めつけてしまうのは仕方ない。したがって、3人の男たちが突然目の前に現れたアーサーを殴りつけ、痛めつけたのも当然だが、さて、アーサーの反撃は？

武正晴監督の『銃』（18年）は、「ある日、偶然、銃を拾ったら・・・？」という世界一安全な法治国家・日本ではまずありえない設定の映画だったが、そこでは、拳銃を所持する→持ち歩く→撃ってみる、と変化していく主人公の“欲望”が興味深く描かれていた（『シネマ43』255頁）。その主人公と同じように（？）、芸人仲間のランドル（グレン・フレシュラー）から「これで自分の身を守れ」と言われて譲り受けた拳銃を所持していたアーサーの欲望が、そこでとっさに“撃ってみる”と言う形に膨らんだのは当然。すると、その結果は・・・？

逮捕されても、これは“笑い病”のための心神喪失状態による殺人だから無罪。単純な弁護士ならそう考えるだけで、それ以上は思考停止になるかもしれないが、格差が広がる社会の底辺でいじめられながら生きている若者アーサーの、その後の避けることのできない現実とは？

■□■ “勝ち組” の男その1 司会者マレー・フランクリン ■□■

2016年11月のアメリカ大統領選挙で予想を覆し、翌年1月に就任したトランプ大統領は当然“勝ち組”の代表だが、中間選挙を控えた今、弾劾問題ををはじめいろいろと大変だ。格差社会が広がる中では、“勝ち組”VS“負け組”の分別がハッキリとしている。

しかして、“負け組”代表のアーサーに対して、本作に登場する“勝ち組”の代表の男その1人は、『マレー・フランクリン・ショー』の司会者マレー・フランクリン（ロバート・デ・ニーロ）。

多彩なゲストを招いて当意即妙なトークを展開するマレーの番組は、人気が高まる一方らしい。地下鉄での3人の若者の射殺事件の犯人はピエロの覆面を被った男だと大きく報道されたから、ゴッサム・シティ市民の注目を集めるとともに、警察が犯人逮捕に躍起となっていた。したがって、警察の捜査の目を逃れるために、アーサーはひっそり我が家に潜んでいるべきだが、彼が今は良い仲になったソフィーを連れ出した日に、小さな場末の劇場で演じたピエロのパフォーマンスが一瞬テレビで放映されたところ、そのパフォーマンスが大人気を呼んだから、アレレ……。そんな人気に目をつけたマレーは、自分の番組にアーサーを呼び、公開スタジオでトークショーを演じることに。さあ、そこでアーサーはどんなトークとパフォーマンスを見せてくれるの？

『マレー・フランクリン・ショー』は軽妙な話術を得意とするコメディアンのマレーが司会を務めることによって人気番組になったものだから、あくまで上品な笑いの提供が同番組のコンセプト。つまり、北野武流の毒舌が売りの番組ではないわけだが、たまたまナイトクラブに出演し、ジョーカーの道化役を演じて大いにスベった(?)アーサーのパフォーマンスの一時の録画を番組で流してからかかったところ、これが大受けしたからビックリ。しかし、そうなればそれを利用しない手はない。ならば、早速そのアーサーに出演交渉し、生番組に出てもらえば、視聴率のアップは間違いなし。マレーがそう考えたのが当然なら、アーサーがその誘いに乗ったのも当然。しかして、ある日行われた公開放送の現場では……？

■ ■ “勝ち組”の男その2 トーマス・ウェイン議員 ■ ■

もう1人の勝ち組の男はトーマス・ウェイン議員（ブレット・カレン）。この男は、ゴッサム・シティ最大の富豪にして実業家。郊外の豪壮な邸宅に住み、行き詰まった市政を開くべく、市長選挙への出馬を表明している男だ。彼の自信满满ぶりはトランプ大統領以上だが、そのよりどころは一体ナニ？それは、本作ではよくわからないが、本作ではアーサーの母親ペニーがアーサーに対して、30年前ゴッサム随一の富豪だったトーマスの使用人として働いていた経歴があり、密かに恋愛関係に落ち、トーマスの子供を産んだ、それがアーサーだと説明したから、アレレ。これは、精神を病んでいるペニーの妄想？それとも……？アーサーがそれをペニーの妄想だと決めつけたのは当然だが、ある日、アーサーがアーカム州立病院で母の記録を調べると、自分が養子でペニーとは血縁すらないこと、さらに、母の交際相手の男性がアーサーを虐待して脳に損傷を負わせたことを知ったから大ショック。すると、自分が今まで母親を愛し続けたのは一体何だったの？

それ以降のアーサーの行動は、第1に母親のペニーに対するもの、第2に恋人(?)の

ソフィーに救いを求めるもの、そして、第3に事の真偽を確かめるべく、自らトーマスの邸宅に乗り込み事実関係を確認しようとするもの、に分けられるので、それはあなた自身の目でしっかり確認してもらいたい。ちなみに、第3の行動では、トーマスの幼い跡継ぎで、まだあどけない少年ブルース・ウェイン（ダンテ・ペレイラ＝オルソン）が登場し、アーサーに対して何の偏見もなく接してくれるので、それに注目。さらに、対面したトーマスが、いきなり「僕はあんたの息子だ」と名乗り出たアーサーを一笑に付したのは当然。弁護士の如く、そこでDNA鑑定を求めたり、「認知の訴え」を提起したりする方法を思いつくが、もちろん本作はそんなことを描くのを目的としたものではない。本作では、そんなアーサーの第3の行動に注目するとともに、スクリーン上に展開されるあっと驚くアーサーの第1の行動と第2の行動にも注目したい。

政治家、とりわけ大臣まで上り詰めた政治家の発言に慎重さが必要なことは昨今の萩生田公一文科科学大臣の「身の丈」発言や、河野太郎防衛大臣の「雨男」発言を見ても明らかだが、トーマスは地下鉄発砲事件の犯人を「仮面に隠れることしかできない不様なピエロ」と揶揄したため、市民の反発を買うことに。トランプ大統領のように、そんな反発を逆にうまく利用できればそれでいいのだが、徐々に抗議活動が強まってくる中、トーマスの市長への道は・・・？

■□■ジョーカーが悪の本領を発揮！なるほどこれが誕生秘話■□■

トークショーでは、司会者とゲストとの丁々発止のやりとりの面白さがポイント。また、そこでは多少の口の悪さや態度の悪さを含めて、どこまで本音をさらけ出せるかもポイントになる。人気司会者のマレーは当然それを心得ていたから、笑いの仮面をかぶったジョーカーの才能を一瞬で見抜き、スタジオに集まった観客の前で、あえてジョーカーに対して刺激的な質問を次々とぶつけていった。ジョーカーもそれに対して手際よく観客受けのする回答を返していたが、ある時、ジョーカーは何を考えたかゲスト席から立ち上げると、つかつかと司会者の方へ。そして、面白半分のように拳銃を取り出すと、何とその拳銃をマレーに向けてぶっ放したから、スタジオは騒然！もっとも、これは集まった観客から大きな笑いをとるための、ピエロ的な演出？それとも・・・？しばらくして、これが演出ではなくれっきとした殺人事件だとわかったが、その後のアーサー＝ジョーカーの逃げ足はどこに？さらに、公開スタジオにおけるマレーの射殺には、ジョーカーのどんな理屈があるの？それとも、これはお笑いを誘うためだけの犯行なの？

香港では、去る10月5日に「緊急状況規則条例」（緊急法）に基づきデモ隊のマスク着用を禁止する「覆面禁止法」が施行された。しかし、マスク禁止の内容と立法手続の双方に大反発した多くの市民は、今なおマスクを着用した大規模デモを続けている。それと同じように、市長候補のトーマス・ウェインが殺害されたゴッサム・シティは、“革命の高まり”であるかのようにピエロの覆面を被った多くの若者たちであふれかえっていた。そんな

大混乱の中、ホンモノのジョーカーが群衆の中に登場すると、覆面姿のピエロたちは大合唱しながら彼を英雄のように迎えたから、ジョーカーは今や得意満面。なるほど、あのアメコミの悪役たるジョーカーは、こんな形で誕生したわけだ。

アーサーことジョーカーを演じたホアキン・フェニックスの演技の達者さと、ケバいい化粧を施したピエロ顔のため、私たち観客には彼の本心が全く読めないから、ゴッサム・シティの市民だけでなく私たち観客にもその不気味さが迫ってくる。そう考えると、あの極悪非道な悪役ジョーカーの誕生秘話は何とも恐ろしい物語だ。すると、本作には描かれていないが、ジョーカーと対峙するべきバットマンの登場は？ひょっとして、あの暴動の中で暴徒によって殺されてしまったあのトーマス・ウェイン議員の息子ブルース・ウェインが、バットマンに変身していくの？もしそうなら、本作にも続編が登場し、『バットマン ビギンズ』とは別の新たな解釈によるバットマンの誕生秘話が描かれるかも・・・？そんなこんな疑問と期待を胸に、次作の誕生を期待したい。

2019（令和元）年10月25日記